



『寛文七年土佐国絵図』195.3cm × 332.7cm

4代将軍徳川家綱が、寛文7年(1667)に派遣した諸国浦々巡見使からの要請をうけて土佐藩が作成した土佐国絵図。2寸1里の縮尺。浦々巡見使は、絵図提出を要請しながら、結局は外洋の荒海を恐れて土佐に来航しなかった。そのため、絵図の清書が藩側にのこった珍しい事例。

「地域記録集 土佐の村々」2号 発行にあたって

土佐山内家宝物資料館

土佐は山の国でもあり、また海の国でもある。太平洋に臨む土佐湾は九十九灘とも称され、東西七百里の長大な海岸線に連続する浦々では、山分や里分とはまた異なる歴史が紡がれてきた。

日本列島に添いながら北流する暖流黒潮は、鯨や鯨、珊瑚などの恵みをもたらしてきた。浦で散見する「院殿大居士」の戒名が刻まれた鯨の墓は、浦人たちの感謝と供養の記念碑である。江戸時代初期に惹起した沖の島論争は、幕府裁定までもつれ込んだ宇和島藩との国境争論であるが、実質は漁業権問題であった。近代では、土佐沖の漁場獲得をめぐる大分県との熾烈な論争が確認されるが、ともに土佐の浦々が海の恵みとともに生きてきた事情のあらわれである。今でも、地元紙には黒潮流軸図が載る「海・漁況速報」の欄があり、黒潮の流れは常に土佐人の見逃せない重要情報なのである。

ところで、現在の私たちが浦に対して当たり前にもつ「浦＝漁村」の印象とは裏腹に、漁村としての浦がいつ頃、どの様にして成立したのかは、実はまだ明らかになっていない。例えば、ある時代までは、浦は水主と船頭の供給地であった。室町時代は土佐国守護代細川氏の、戦国期においては四国の覇者長宗我部氏の、そして江戸時代土佐藩の水軍を支えたのは、浦々の民であった。一豊は入国早々に、浦々の水主・船頭調査を実施しているが、一豊にとつて浦とは、水軍編成の要地として映っていたのである。漁村としての浦が広く成立して以降も、物資の集積地や風待ち・潮待ちの中継港としての浦も散在し、その歴史は思う以上に複雑なのである。しかも、土佐の上灘(東部)と下灘(西部)では、地理的にも地勢的にも浦のあり様は異なり、更に個別をみていけば、おそらくは山分や里分以上に強い個性を有するものと思われる。

一方、浦を理解するためには、当然ながら海の歴史、すなわち海路の時代的変遷を知る必要がある。戦後のある時まで、高知と本州(神戸・大阪・那智勝浦・川崎等)や九州(大分・鹿児島等)とを結ぶフェリー航路が多くあったが、現在では宿毛・佐伯航路を残して全てが廃止となった。その後

に生まれた子ども達は、人と人、地域と地域を結びつけてきた海を知らなくなっている。

考えてみれば、幡多郡中浜浦の漁師万次郎が出港したのは高岡郡宇佐浦であったし、安芸郡室戸の遠洋船の乗組員の多くは幡多郡清水出身であった。今でも、節句の季節になると安芸郡では用いられない職を立てる家があるが、これは母親が幡多郡出身の家である場合が多い。これらのことは、土佐湾という一つの地域・歴史の舞台を想定して、陸地中心の考えを逆転させた視点をもつてはじめて理解できることである。

海の道は限りなく続く。土佐の浦で見かける紀州人の墓は、捕鯨や鯨漁の技術を伝えた紀州人と土佐人との交流の証左である。戦国期、日本と中国との交易航路の一つとして、「南海路」とよばれた土佐沖の経路は隆盛を極めた。江戸時代の鎖国体制下でも、イスパニア・中国・琉球などの船が黒潮に運ばれて土佐に漂着し、瞬時の交流がもたれた。江戸時代初期、困窮を極めた百姓は、時として逃散を企てたが、浦の百姓は海を伝って九州へ通れたこともあった。一九七二年に沖繩が本土復帰する以前、四国西端の海には沖繩の糸満舟が頻繁に密漁に現れ、粗食に耐えながらの漁をみた地元民はこれを黙認したとも聞く。

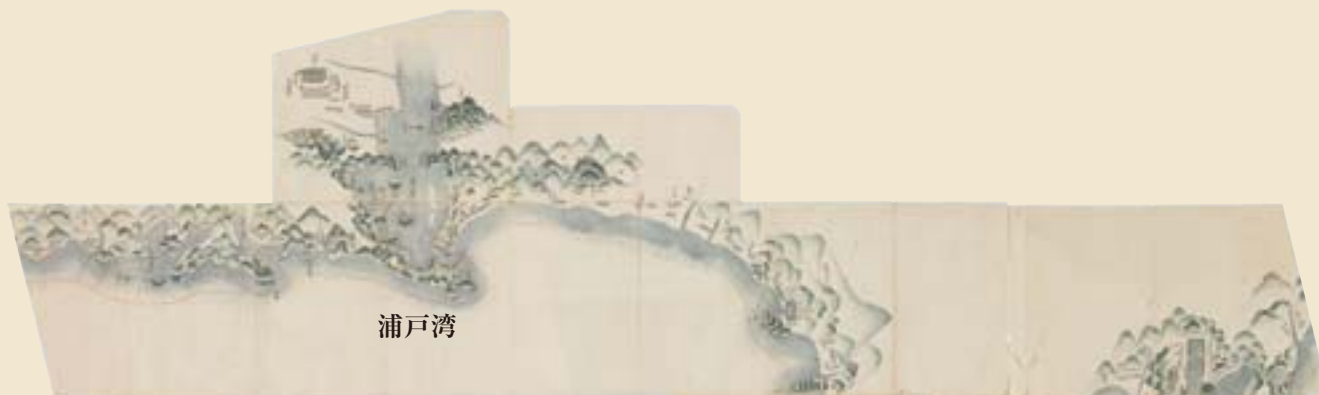
また、海の道は現世のみではない。幡多郡金剛福寺の宗教的権威は朝廷との結びつきを背景としているが、土佐沖には観世音菩薩が住む補陀落があり、その東の門が金剛福寺であるという天皇や貴族の信仰がその淵源となっている。このように、土佐の浦をめぐる歴史は、陸と海、日本と世界、聖と俗、現世と来世の境界で展開する実に広大悠遠なものなのである。

しかし今、中山間地域で問題とされる過疎と高齢化の進行は浦分も同様で、これに加えて、浦分では捕鯨の禁止、メジカ漁の不振、機器燃料の高騰、産業構造の変化、更に東日本大震災を機に急速に進む津波対策等々で、山分よりも急激な変化にさらされている。第二号では浦の一つとして幡多郡清水をとりあげ、歴史と今を記録しておくことにした。

かいひんしゅうこうず
『海瀨舟行図』(土佐国分)

寛文7年(1667)の浦々巡見使が調査終了後に編集、将軍に上納した西日本海岸線の絵地図。附属の巡見牒には、海上交通情報と、浦々の村名・家数などが詳細に記載されている。

この絵図は、土佐藩儒者の谷秦山が、藩庁から特別貸出をうけて転写したもの。



浦戸湾



室戸岬



足摺岬



下灘

上灘

安田	田野	奈半利	カリヤウコ	御僧村	羽根	吉良川	元村	浮津	室津	東ノ津呂	見津	椎名	加布里	崎ノ濱	入木村	野根	生見村	白濱	甲浦	
浦戸	種崎	仁井田	十市村	改田	前ノ濱	久枝	吉原村	赤岡	岸本	夜須濱	手結	和食	赤野	穴内	安喜	松田嶋	伊尾喜	下山	唐濱	
上川口	有井村	井田	佐賀	鈴浦	与津	志和	上ノ加江	押岡村	篠葉	小草村	久禮	須崎	野見	井ノ尻	福嶋	宇佐	新居	高知	御臺瀨浦	
檜浦	下河口	三崎	越浦	清水	中ノ濱	松尾	伊佐	津呂	窪津	伊布利	大岐村	下ノ加江	布浦	下田	伊屋村	出口村	田野浦	入野村	浮津	
						木津	ウ須丈	花村	錦浦	外浦	内ノ浦	湊浦	小盡	福浦	榎浦	泊浦	橘浦	天地	柏嶋	古間目

『海瀨舟行図』附属の『巡見牒』に記される浦々